

ABSTRACTS

Translated by Tae Mukai

論文

1. 一対一の対話から集団の討論へ：現代におけるイスラエルとパレスチナの過去を探る

アン・E・キリブロー、サンドラ・A・スカム、ハナ・アブ・ウクサ、ワリド・アトラシュ、ロン・ベエリ、レイチェル・ハシシ、ハナン・ハラビ・アブ・ユセフ、オルナ・ナガル・ヒルマン、ベレド・ラズ・ロメオ、ミナ・ウェインステイン・エヴロン

要旨

本論では、イスラエルとパレスチナの議論の飛び交う過去を扱うプロジェクトについて述べる。絶え間ない紛争という背景に反して、アラブ人もユダヤ人も自らの関わるコミュニティにおいて、様々な意見をもって相互に関わり合っていることを発見した。この共通した背景をコンテクストに、参加者たちは意見の合意する部分とともに、相違する部分をも探った。このプロジェクトの主だった精神というのは、しかしながら、協力というものだった。この精神を象徴したのは、プロジェクト参加者たちによる、イスラエルがヨルダン川西岸地区（パレスティナ自治区）沿いに建設されつつある壁によって破壊される集落遺跡を保護するための活動が成功していることである。

キーワード：イスラエルとパレスチナの紛争、遺産、パブリック・アーケオロジー、コミュニティ、多義性

2. ベンジャミン・フランクリンは誰のもの？歴史考古学的遺跡・フランクリン邸跡から得られた新説への反応の検証

パトリス・L. ジェップソン

要旨

フィラデルフィアにあるベンジャミン・フランクリンの邸宅跡（1953年～1975年発掘）から導かれた最近の考古学的評価は、現在に生きる合衆国コミュニティに有意義で、新しい歴史的解釈を明らかにする。フランクリンが自由のために尽くしたアフリカ系アメリカ人共同体の子孫たちが、国史的な記憶の聖地をつくろうとフランクリンの歴史を掘り返すとき、奴隷保持者から奴隷廃止論者になったフランクリンの話が、歴史の中で繰り返されているようだ。ネイティブアメリカンや労働運動、女性や同性愛者の市民権に関連する新たな歴史も発見されている。

この新たな解釈への反応は、多様なコミュニティの課題を形作る、さらに広いコンテキストを考慮に入れて検証される。

キーワード：プラグマティズム（実用主義）、論争のある遺産、市民参加

3. 公共の過去の民営化：考古学遺産マネジメントの経済学

ダニエル・D・クルーツァー

要旨

メキシコにあるビルヘン峡谷（カニャダ・デ・ラ・ビルヘン）とテオティワカンというスペイン征服以前の遺跡は、パブリック・アーケオロジーと国家と個人的興味との戦いの真っ只中にある。メキシコの文化遺産保護法は、金銭的利益に基づく活用を主張して、考古学的遺跡に経済的価値を課する民営化政策によって出し抜かれている。個人の権利の伸張によって、遺跡がさらに危機的状況に陥るにつれ、遺跡に対する国家の義務は衰えてきている。文化的遺産の管理者として行動している政府が、過去を売るなどというばかげたことをする限り、公共の権利は剥奪されるだろう。バージェン峡谷やテオティワカンをめぐる対立が示しているように、こうした問題は地域を超え、世界的コミュニティの問題となる。考古学者は過去の保護を託されており、遺跡が切迫した危機に脅かされていると明確に伝えるメッセージのもとに、民営化の傾向に立ち向かう戦略を練らなければならない。

今日、世界中の遺跡は国民国家によってますます危機にさらされている。民営化政策という経済は、民衆から彼ら自身の過去を奪う恐れがある。過去は民衆にとって象徴的な資本としてはたらくが、この象徴的資本を経済的資本に変えて利益を得るのは政府である。本論では、この変換が関連しつつも異なった方法で起きている、メキシコでの最近の事例研究を詳しく説明する。そしてこの研究は考古学者に、過去を守るために民衆とともにもっと活動的になってほしいと結論づけるのである。

フォーラム

1. 受容力、世界主義、人間の尊厳という3つの概念。遺産の未来の再概念化

ビバーレイ・バトラ

要旨

パレスチナの文化遺産の破壊的イメージを出発点として、本論ではWACの未来について熟考しようと思う。その方法として、文化遺産と「ワン・ワールド・アーケオロジー」が、現代の哲学的操作主義に関わっていることを再考する。私の戦略は3人の著者、バージニア・ウルフ、ジャック・デリタ、エドワード・サイードを経て、WACの未来についての議論に「3つの概念」、-受容力、世界主義、人間の尊厳-を「贈る」ことである。私は、これらの「概念」は文化遺産を再概念化する基礎となるだけでなく、WACの組織的アイデンティティと将来の

形態変化に関わる、核心的な視点を導入することができると思う。私の結論を再度述べると、WACの「来るべき時代」は次の必要性を具体化させるということである。すなわち、基本理念と累積するアーカイブを記念だけでなく、この組織の未来を、批判的・反動的に、新たな支持者と関心へ、そして「選択的」あるいは「併行的」考古学・遺産へとひらく必要性である。

2. 3度の撮りなおし：多元的考古学のためのWACの意義 クリストバル・グネッコ

要旨

本論では、最近の考古学の経緯は3回撮りなおした記録として見なされうることを議論する。1回目の科学的プロジェクトは、この学問分野の現代的起源始表している。2回目は、歴史の価値を下げたもので、従ってその成果に責を負う学問的装置である。そして3回目はその反動として資料に戻って、多元的で、水平的で、地域的に意味のあるものとしての考古学的成果の理解ができるということである。WACの役割は、こうした意味で注目される。

3. 今日のワン・ワールド・アーケオロジー コーネリウス・ホルトーフ

要旨

1986年に発足して以来、世界考古学会議は、政治的・倫理的な情報に基づく考古学についてのグローバルな観点、「ワン・ワールド・アーケオロジー」の名のもとに知られるようになった観点を擁護してきた。この小論で、私はワン・ワールド・アーケオロジーがグローバリゼーションという時代の考古学であることを論じる。すなわち、ワン・ワールド・アーケオロジーはまさしく倫理的・政治的に動機付けられた試みであるべきで、考古学者に可能な方法によって、この惑星に住む全人類の世界的連帯を強めるとともに、人類の間に存在する著しい不平等を減らす試みに他ならない。私はOne World Archaeologyと世界考古学会議の務めの両方にとって、もっとも重要な主導的理念は連帯と包括性の2つであるべきだと提唱する。また本論では実践的に意味のあることも多く提案している。

4. 考古学とその完全性：原住民コミュニティの資源としての世界考古学会議 ドロシー・リパート

要旨

世界考古学会議は、考古学という専門分野に真剣に関わろうと望む先住民にとって生きた情報を提供することが可能である。ネイティブ・アメリカンとして経験する考古学は、ほかの先住民集団とも共通しており、WACの倫理規範は、WACの組織が先住民コミュニティと協力することをいかに重視しているかを明示し

ている。教育やネットワーク、専門性、文化的遺跡の管理などを含む、WACが先住民について考えるいくつかの目標について述べる。